

HuMA News Letter

○ イラン南東部地震復興支援への掛け橋ミッションの開始

「松下朋子さんと鷓飼理事長 地震6ヶ月後のイラン・バムを訪問」

ジャパン・プラットフォームから民間支援助成金交付の内示を受けて6月13日から20日まで、HuMA事務局の松下さんと鷓飼理事長があの大震災の被災地バムとテヘランに飛びました。バムでは仮設住宅の再建が急ピッチでしたが、今なお瓦礫の撤去がすすまない街中にはテントが沢山立ち並び、日中40度を越える暑さの中々はきびしい生活に耐えているようです。バムに三つあった病院は壊滅し、そのうちの一つ、アルファトニアン病院では補修再建すべく工事が行われていました。また、中核的な病院だったイマームホメイニ病院は、プレハブの仮設建物で外来診療が行われています。しかし、X線室はあっても自動現像器が壊れて修理ができないのでレントゲン写真1枚すらとれない状態です。国際赤十字連盟とイラン赤新月社とが共同で運営しているIFRC病院はテントで診療をしていますが、1日外来700人から900人、入院病床は60床で運用しているとのことでした。少し複雑な患者さんはすべて州都ケルマンに転送しているそうです。

ちなみにケルマンまでは2時間半かかります。診療に従事しているのはすべてイラン人で、国際スタッフは統計などを取っている数名の医師がいるだけだそうです。

バムの街は行政機構も壊滅したので、12のゾーンに分けてイランの各州がそれぞれのゾーンを管理していますが、街の中心部(ゾーン5)はテヘラン市民評議会が管理しています。このゾーンのヘルスセンター(日本でいうなれば保健所と診療所を兼ねたもの)がいまだにテントの過酷な状況下で活動しており、今回の訪問でこのヘルスセンターに仮設のプレハブをHuMA/JPFが供与することで合意ができました。予算もJPF評議会で承認されましたので、早速土地探し、プレハブの発注、契約などの作業が始まります。なおこのプロジェクトのためにVigen Haghverdianさん(テヘラン在住,61歳)に現地カウンターパートをお願いすることも決まりました。

「ジャパン・プラットフォームより予算執行が決定！」

6月22日ジャパン・プラットフォーム評議委員会にて、正式にミッション申請が承認され、7月から2ヶ月間におよぶZone5ヘルスセンター仮設診療所設営及び現地における保健診療活動、公衆衛生活動の強化支援を実施することとなりました。今後の活動について随時御報告申し上げます。



写真(1)
補修工事中のアルファトニアン病院



写真(2)
イマームホメイニ病院の救急部建物



写真(3)
ゾーン5のヘルスセンター外観



写真(4)
ゾーン5のヘルスセンター内部

「イランバム地震保健医療復興支援募金」のお願い

HuMAでは、イラン・バム保健医療復興支援活動への募金を集めております。御寄付頂きました募金につきましては、現地ヘルスセンターの復興活動資金として活用させていただきます。御支援・御協力の程何卒宜しくお願い申し上げます。

*お振込の際には、別紙郵便局の振込用紙を御利用下さい。

○ 第3回HuMA定期総会

平成16年5月29日午後1時より 日本医科大学橋桜会館(東京都文京区向丘)にて、第3回HuMA定期総会が開催されました(平成16年3月31日現在正会員158名、賛助会員36名。正会員158名のうち出席者16名、委任状73名、合計89名)。平成15年度事業報告書及び会計報告、平成16年度事業計画案及び予算案の決議の他、現在進行中の海外支援活動及び国内研修などの報告がされた。総会后、日本レスキュー協会より理事/事務局長河合伸朗氏による活動紹介が行われた。

[海外支援活動](1)イラク支援:BHNテレコム協議会は、イラク復興支援の一環として衛星を用いた遠隔教育システムによる支援を検討中。その中で、イラク人医師に対する教育を行えないかHuMAへ提案がきている。(2)イラン地震復興支援:ヘルスハウス再建事業計画 [国内セミナー、研修、教育] (1)災害看護研修、(2)神奈川県災害医療従事者研修、(3)企業災害研修、(4)順天堂大学浦安病院災害研修 (5) JPF学生会議、国際協力セミナー

○ 第6回 HuMAセミナー開催 「ミャンマーにおけるマラリア対策の現状と今後」

日時:平成16年6月26日(土)午後2時から5時30分

場所:日本医科大学橋桜会館(文京区千駄木)

今回はJICA長期専門家の中村正聡氏がミャンマーから日本に帰国されており、これまで派遣された短期専門家(白川千尋氏、林真砂美氏、村上勉氏)とともに講演頂きました。

中村正聡先生のミャンマーBago地区を中心とするマラリアをめぐる諸問題の現状と打開の糸口についての解説(洞察)から始まり、島田靖先生が医療機関に来たマラリア症例の分析、そして村上勉氏がマラリア検査の問題について話しました。さらに、新潟大の白川千尋先生が文化人類学者としてみた住民のマラリアの受け止め方や受診行動、さらに看護師林真砂美さんから末端の公的保健サービスシステムからのアプローチについて発表があり、充実した3時間強ミャンマー軍事政権下のマラリア対策の勉強をさせていただきました。



また、HuMAの新規事業となる「イラン、バム市地震復興支援プロジェクト」に関する報告会をHuMAの先遣隊として現地に入った鶴飼理事長及び松下さんから報告がありました。

○ 日本台湾NGO会議に参加

2004年6月3、4日に台湾国立政治大学において、台湾外交部、国立政治大学およびBHNテレコム支援協議会主催による『日本台湾NGO会議』が開催されました。このフォーラムは、昨年開始されたもので、台湾と日本のNGOがそれぞれの活動内容を知り、今後の協調関係を築くために開かれたものです。HuMAとしては昨年日本で開かれた第1回に続いての参加となります。日本側の出席者としては、BHNテレコム支援協議会を始めPWJ(ピースウィンズ・ジャパン)など10団体16名が出席し、HuMAからは島田事務局長と小笠原が出席しました。台湾からは外交部を始め医療支援専門のNGOである台湾路竹会や主に2001年の台湾地震後に出来たNGOが20団体ほど参加しました。



会議では、台湾の女性NGOの活動、台湾地震の際の緊急・復興支援活動などが紹介され、様々な台湾NGOの現在に至るまでの流れが紹介されました。特に、台湾地震の経験が各種のNGO発足に繋がった背景が特長的でした。台湾のNGOにはマイノリティーグループへの支援に力を入れている団体が多く、専門的な分野を確立しているNGOがまだ少数に留まること、政治的な背景による問題、資金面での問題点が挙げられました。一方、日本側は、国際的に、種々の専門分野での活動を拡大している状況が発表されました。また、JPF(ジャパン・プラットフォーム)設立の必要性と経緯や、その結果得られた活動の広がり、迅速性、ドナーとのコミュニケーションの充実などを台湾側へアピールする形となりました。HuMAは、島田事務局長より本会の成り立ちから昨年のヨルダンミッション、各種セミナー・研修の紹介、また今後の活動としてミャンマー・マラリアプロジェクト等を報告しました。また、パネルとしての発言の中では、非医療系NGOとの協力という点についての提案をし、興味をもった出席者からの反応もみられました。

初日の日程終了後は外交部部長主催のレセプションでは、「今や台湾は支援を受ける国から支援をする国へ変わってきた。よって、日本のNGOの活動状況を学び今後の参考にさせて欲しい」と外交部長が述べられました。

この会議のまとめとして、台湾NGOより資金面での課題解決のための台湾外交部への期待と、台湾でもJPFのようなシステム作りが必要であることが強調されました。日本のNGOも協力を進められる可能性を示し、資金面、政治面、実務面とも課題は存在するものの、今後国際支援の現場で協調関係を持って台湾と日本のNGOが共に取り組んでいきたいという和やかな雰囲気の中で会議を終えることが出来ました。

来年もより広範なアジア地域の国々へ参加を呼びかける話もあがり、アジアフォーラムとして開催場所を変え、この会が存続していく予感を感じました。(文責:HuMA会員 小笠原看護師)

ただいまの会員数

187名内賛助会員27名

(2004年6月現在)

発行 = 特定非営利活動法人災害人道医療支援会

連絡先 = サポート事務局 〒111-0051東京都台東区蔵前1-3-11大東紙ビル2F

TEL/FAX: 03-3866-8988 Email: info@huma.or.jp ホームページhttp://www.huma.or.jp